

英語俳句の文体分析

A Stylistic Analysis of English Haiku

中 村 秩祥子
NAKAMURA Chisako

キーワード

[英語俳句] English Haiku ・ [文体分析] stylistic analysis

1. はじめに

俳句は、日本文化であり、世界最短の詩形とされる。短いということで手軽にできる一方、よりよい表現方法を生み出そうとすれば、いくらでも深く探求できるので、世界各国で人気がある。英米圏の国々では、情操面を育成する目的と音節を認識させる言語面の教育の方向から、小学生の授業で英語俳句作りがとり入れられている。しかし、英語で自作するときは言語、文化、環境などの相違もあり、日本の俳句作りの決まりをそのまま応用することはできない。そこで、日本でも俳句の各流派が主張して、それぞれの主義で少しずつ決まりを変えたのと同じように、英語俳句作りでも、英語という言語に合うように、日本語の俳句の決まりや考え方を部分的に踏襲して作句活動が行なわれている。つまり、いろいろな立場が出て、定まった基本が無い状態といえる。しかし、短い簡潔な表現である点と心情を直接表わさないで、描写表現を通して伝達する点は、俳句の核として共通する。

さて、実際の英語俳句をみると、二大傾向に分かれる。一つは、日本語俳句の形式的規則を守り、近づけようとする立場ともう一つは、俳句の心的態度は守るが、日本語の形式規則にはこだわらず、英語の特性に合わせる立場である。

本稿では、Richhold (2002) がまとめた24の英語俳句作成上のテクニック¹に基づいて、修正や補足説明をして、再分類する。まず、第2節で、一般に普及している英語俳句の基本的形式的規則を紹介する。次の第3節では、主として言語形式的面から分類していく。第4節では、言語形式外的手法すなわち内容面から分類していく。最後に、まとめと今後の研究課題について述べる。

2. 英語俳句の基本的形式規則

日本語と英語の言語の特性や環境の相違から、日本語俳句の基本的規則の5・7・5音の構成と季語を含むという点を英語にそのまま適用するのは難しい。そこで、英語俳句では、下記の(1)に見られるように、3行に分ち書きをして²、できるだけ簡潔な表現をするように

している。伝達上意味的に明示する必要がないならば、be動詞、冠詞、名詞の複数形の語尾、前置詞、接続詞を省略することが多い。また、文頭でも小文字で始めることも多い。季語にこだわらない場合が多く、季節の語句を取り入れることを必然とする考えの者でも日本語の季語に従うのではなく、自国の現代の季節感を示す語句を使うこととしている。

(1) Lily:

out of the water...

out of itself

(Nick Virgilio)

日本語では、古語や古語文法に則って俳句を作成するのが正式であるが、英語では、現代の平易な語句を使用している。

英語には、切れ字に相当する語句がないので、疑問文や感嘆文などの文の種類を使用したり、改行などの形式の効果を利用したり、記号の意味を適用したりしている。次の表1は、記号とその表わす一般的意味をまとめている。

表1 切れ字に相当する記号とその一般的意味

記号	示す意味
:	完全な休止
;	半休止
...	言わないままの何かが残されている
,	わずかな休止
-	言い換え
.	完全な終止

俳句は、一場面の一瞬の情景を表現することを原則とするので、現在形を使用する場合が多い。また、感情を直接表わす語句は避けて、描写表現から感情を暗に伝えるようにする。以下は、上記の原則をまとめたものである。

- 1 形式は、基本的に3行書きで、小文字で始める。
- 2 できるだけ簡潔な表現を目指す。(伝達上可能ならばbe動詞、冠詞、名詞の複数形の語尾、前置詞、接続詞を省略する。)
- 3 平易な語句を使用する。
- 4 季語は無くてもよい。
- 5 切れ字の役目に、疑問文などの文の種類や改行などの形式やダッシュ(-)、コンマ(,)などの記号を使用する。
- 6 Haikuは一瞬の情景を切りとって表現するhere and nowが原則なので、現在形を用いることが多い。
- 7 感情の直接的な語句を避けて、表現から感情が暗に伝わるようにする。

日常生活の中のできごとを、視点を変えたり、語句使用を工夫したりして表現するのが、俳句の本質である。では、どのような表現方法があるかについて、次節で述べていく。

3. 言語的手法

Richhold (2002) は、英語俳句の 3 行という短い表現形式のなかの工夫を分類して 24 通りにまとめている。しかし、彼女の分類は、言語的な工夫や意味の効果上の工夫などの区別を明確にしないで、混在させている。また、分類に不十分な点や重複的な部分もみられる³。さらに、彼女が例示している例が適切ではなかったり、わかりにくいと思えるものがある⁴。そこで、この節では、彼女の分類に基づきながら、上記に指摘したことを修正して、再分類することを試みる。まず、大きく言語的手法と言語外的手法の 2 つに分け、それぞれさらに下位区分して示す。この節では、言語的手法による分類を示していく。

3. 1 二重性

まず、語彙レベルから始めると、掛詞的技法の Pun (同音異義) があげられる。

- (2) Long after sundown
the sound of ripe plums
plumping the ground
(Lenard D. Moore)

(2) は、フルーツのプラム “plum” がドスンと落ちる “plumping” と似た音で表現している。同様なものとして、同一語に二重の意味をかけているものもある。よく使用されるのが、地名とそこから連想されやすい語やイメージを利用する手法である。

- (3) frozen Quaker Pond—
even between the dry hummocks
deep silence
(Bruce Ross)

(3) では、pondではなく、固有名の Quaker Pond とわざわざ入れているのは、Quaker からクエーカー教の儀式 (沈黙の集会) のイメージも利用できるからであろう。

もちろん、地名以外の語句に二重の意味を重ねている場合も多い。

- (4) nightfall
horse chestnuts hit the parked car
(Alan Pizzarelli)

一般に英語の俳句で、「夕暮れ」を示すには“dusk”を使用している場合が多い。音節が短いことと詩的表現のためであろう。しかし(4)では、“nightfall”を使用している。これは、「夜、落ちる」の意味も含んでいると残りの行の意味からわかる。

上記の場合は語の意味の二重性であったが、機能の二重性を利用する場合もある。英語では、ほとんどの単語は動詞の機能と名詞の機能を合わせもっているからである。そこで、動詞の機能と名詞の機能を入れ替えて両方の意味を利用する場合もある。

- (5) spring rain
the willow strings
raindrops

(5)の“spring rain”は、「春雨」とも「飛び散る雨」ともとることができる。また“the willow strings”は、「柳がつなぐ」とも「柳のひも」ともとれる。“raindrops”も「雨粒」とも「雨が落ちる」ともとれる。

同じく、英語俳句のbe動詞の省略の特性と英語の動名詞の名詞または現在分詞の特性を利用して、行為者の解釈をあいまいにして二重の意味を引き出す手法もある。

- (6) under the mallard's
careful step
breaking ice
(Bruce Ross)

(6)の場合は、マガモが氷を壊したのか、壊れた氷に気をつけてマガモが歩いているのかははっきりしないが、視点を変えれば両方のことが同時に起こっているともとることができる。

3. 2 構成

英語俳句の3行構成の点を利用している場合がある。読み手は1行目から順番に読み進めていくという前提で、その解釈過程を利用するのである。第一行目を前提とすることで、以下の行の句の意味が通じてくるようにする構成が多い。

- (7) the water stills:
a crayfish enters
the hollows of my face
(Rod Willmot)

(7)では、水が波一つなく固定状態なので、水面に映る作者の顔の穴へザリガニが入って来ることができると、1行目を前提として、以下の句の意味がわかる構成となっている。Reichholdは、第1行と第3行のイメージが強い関係で結ばれたとき、俳句はバランスがとれると述べて、以下の(8)の例を出している。

- (8) rain
the horse's head bowed
straight down
(Reichhold: 2002より)

(8) では、2 行目の馬のうなだれ方が、第 3 行目の「まっすぐ落ちる」につながるが、第 1 行目の「雨」の降り方の様子にも関連している。

最後まで読むと、第 1 行目の意味が別の解釈になってくる手法もある。なぞなぞ的手法といえる。

- (7) small green growing things
in my old dirty locker
on my ham sandwich
(Ashley)

(7) は、小さな緑の生えているものの正体が、最後まで読むとカビであると、書かれていないがわかってくる。

3. 3 比喩

レトリックの方法の一つに、比喩があるが、英語俳句でもよく使用されている。“like” や “as” のような語彙で表わして例えているのが Simile (直喩) であり、これらの語彙を使用しないで例えているのが、Metaphor (暗喩) である。

- (8) sea lions bark
their breath comes ashore
as mist
(Jane Reichhold)

(8) では、アシカの息が「霧のように」岸辺に漂ってくると as を使って例えている直喩の例である。

- (9) They once moved
among the stars—
elk antlers in the snow
(Alexis Rotella)

(9) では、星々とは、天の星ではなく、地上の生命あるものを指した暗喩である。

3. 4 比較

比喩は、あるものを別のもので例えている手法であるが、2つの異質なものを並列して、それらを比較することで生み出される効果をねらった手法もある。これも直接言語表現を手がかりとする場合と言語表現からの推測を手がかりにする場合の2大別できる。

まず、直接言語表現を手がかりとする場合を述べる。(10)の例は、Comparison (類似比較)の手法である。

(10) waterfall at night—

her long

black

hair

(Charles D. Nethaway, JR.)

(10)は、夜の滝と長い黒髪を比較して、黒々とした様子、流れ落ちる様の類似点から、読み手に夜の滝の生々しい情景を伝えている。二つの異質のものを比較して、その類似点を引き出して、より鮮明な印象を与える効果となっている。

上記の例のように、すぐに類似性が見つかる場合や類似性が見つかるまで、時間がかかるものもある。これらをClose Linkage (密接なつながり)とLeap Linkage (遠いつながり)に下位分類できる。次の(11)にLeap Linkage (遠いつながり)の例をあげておく。

(11) on the creek bottom,

century-old snapping turtle:

years of beer bottles

(Nick Virgilio)

(11)では、年老いたかみつく亀と長年のビール瓶、よく考えれば、ビール瓶の壊れた角で足を切ったりすることが、「かみつく」と結びつき、また長年川底にあって、茶色のビール瓶にも藻が生えて、甲羅に藻が生えた年老いた茶色の亀との結びつき、じっとしてほとんど動かない年老いた亀と川底で自ら動くことのないビール瓶との共通性などがわかってくる。

類似ではなく、Contrast (対比)に焦点をおいている場合もよくある。

(12) sculpture garden

the pampas grass

every which way

(W. J. Higgins)

(12)は、生命の無い彫刻物と生命のある植物のススキとの異質物の対比である。他によくあるのが、色や明暗の対比もある。

- (13) puzzled crow's
snow covered
beak
(Bruce Ross)

(13) では、鳥の黒と雪の白の色が対比されている。

次に、言語表現からの推測を手がかりにする場合を述べていく。これは、2つの異質の組み合わせをAssociation（連想）によって関係づけていく場合である。

- (14) touching the fossil—
low rumblings
of thunder
(Ruth Yarrow)

(14) も化石と雷の全く異なる無関係のものの2つの組み合わせだが、この2つの類似点または相違点を見つけるには、それぞれのイメージの共通性を探することになる。化石に触れたとき、「雷」が鳴るということで、この両者につながりがあるような暗示から、それぞれの連想を関係づける何か神秘的なイメージを読み手に引き起こしている。この場合もClose Linkage（密接なつながり）とLeap Linkage（遠いつながり）に下位分類できる。(14)の例は、共通的なイメージの連想を見つけるには比較的複雑なので、Leap Linkage（遠いつながり）の例といえる。すぐに、関係が連想できる例を(15)にあげておく。

- (15) Snow falling
on the empty parking lot:
Christmas Eve...
(Eric W. Amann)

英米では一斉にクリスマス休暇がとられて、会社や大型スーパーは閉じている。だから、駐車場はいつもとちがって全く車がなくなる。クリスマスイヴと空の駐車場の関係を英米圏の人々はすぐ連想できる。

3. 5 書式や音声による手法

書式や音声で、俳句にさらに意味を付随する方法もある。次の(16)は、俳句の意味が書式でも表現されている。また、(17)では、音声が俳句内の語句の意味を表現している例である。

- (16) walking the snow-crust
not sinking
sinking

(16) では、書式でも沈んでいっている様子が表されている。

(17) Stars . . .

I wish I were free

to fall

(Alexis Rotella)

(17) では、“to fall” の音が、ヒューッと一瞬で落ちるイメージを醸し出していることから、流れ星であることがわかってくる。

4 言語外的手法

第3節では、言語表現上を手がかり（推測も含めて）にした種類の手法を述べてきた。これらは、どちらかという、主に言語の形式面の特性を利用しているといえる。比喩であっても、例えるもの、例えられるものの関係が言語上に明示されている。この節では、言語形式を利用というより、視点の利用を主眼とした観点からの手法と内容からの印象による分類について述べる。その意味で、「言語外」とした。

4. 1 視点による分類

いくつかの俳句の定義とされる中には、here and nowの一情景を表現するものという伝統的考えもある。つまり、言葉によるSketch（写生）の手法を使うことである。次の(18)は、一情景を表現している。

(18) A bitter morning:

sparrows sitting together

without any necks

(J. W. Hackett)

(18) は、寒い朝、雀が首を縮めて、首無しのようにみえる光景が絵のごとく心に蘇る。他に、短い時間的経過をともなった映像的な蘇りを引き起こす場合もある。

(19) the snake

and the grass

are one

(Jim Kacian)

(19) では、目に見えていた蛇がくさむらに入っていき、今、草が蛇の動きで動いている様子が浮かぶ。時間経過はあるが視点としては、対象物の一点を追っていることで、固定されているといえる。同様に、ある一つのものに視点を置いているのだが、次の(20)のように、そ

の焦点をより小さくしたり (narrowing focus)、反対に (21) のようにより大きくする (broadening focus) 手法もある。

- (20) dead cat...
open mouthed
to the pouring rain
(Michael McClintock)

(20) では、猫一匹の死体全体から口へと小さく焦点化されて、死のイメージがより鮮明に伝えられてくる。

- (21) In the fading light
A crimson leaf sinking
To the bottom of the pool
(Keith southward)

(21) では、「沈む一枚の葉」の一点にまず視点があり、それが「プールの底へ」ということで、プール全体を背景にすることになり、カメラ的には、「葉」からプール全体へと焦点がより大きく広がっている。

さらに、視点の焦点を瞬時に切り替える手法もある。

- (22) Circling higher and higher
at last the hawk pulls its shadow
from the world
(George Swede)

(22) は、第1行めでは視線は上空へ上空へと鷹を追っていたが、第2行めでは突然下の地面の影に転じている。

視覚に限らず、大きな意味における視点の切り替えとして、感覚の切り替えの表現手法もある。

- (23) Searching on the wind,
the hawk's cry...
is the shape of its beak.
(J. W. Hackett)

(23) では、鷹の鋭い鳴き声の音を鷹の鋭い嘴の形として表現して、聴覚で捉えるイメージを視覚のイメージで伝えている。さらには、実際知覚できていないが、想定した感覚で捉えたイメージで表現している場合もある。Reichhold (2002) は「Improbable World (ありえない世界)」として項目をあげているが、これは、感覚の切り替えの一種とみなしてよいであろう。

- (24) over spatterdocks,
turning at corners of air:
dragonfly
(Nick Virgilio)

(24) は、大氣中に角があるわけではないが、とんぼの動きで、あたかも大氣中に角があるように見えることで、このようなありえない表現を使用している。

視点の切り替えの一種として、逆説 (Paradox) もあげることができる。逆説とは、一見矛盾しているようでも、考え方を換えればつまり、視点を変えれば通じる意のことである。

- (25) Winter stillness
the sound
of a branch breaking
(Margaret Saunders)

(25) では、冬の静けさが、枝の折れる音で際立つということだが、静か＝音が無いとする一般的考えとは矛盾することになる。

4. 2 印象による分類

この節では、蕉風俳諧の理念とされているが定義が明確化されていない、わび、寂び、幽玄など、内容からの印象による分類を試みる。確かに、曖昧な領域ではあるが、俳句の中でその存在は認められているので、分類をしておく必要はあると考える。わび、寂び、幽玄に関する単純な定義をReichhold (2002) に拠って示しておく。

Reichholdは、「わび」をあえて言うならば「質素な生活の結果で見出される美」で、すりきれて、色あせたジーンズには、「わび」があり、漂白したデザイナーのジーンズには到達できないものと説明している⁵。

- (26) drift of snow—
spider webs whitening
corners of the shed
(Dorothy McLaughlin)

(26) は、小屋の片隅の蜘蛛の巣を題材にしている、質素な場で普段人が見過ごしている光景を表現している。

「わび」の対となる「寂び」は、あえて単純に言えば「孤独感を伴った美」と、Reichholdは定義している⁶。

(27) In the empty church
at nightfall, a lone firefly
deepens the silence
(Nick Virgilio)

(27) は、人気の無い教会での夕暮れ時の一匹だけの蛍の光景を表現していて、何かしら孤独な印象を与えている。また、教会という場所やおそらく幽かな光を放っている蛍の様子は、次の「幽玄」の印象でもあるといえる。

「幽玄」は「神秘、計り知れない深さ」と、Reichholdは定義している⁷。

(28) Overnight snow,
opening the blinds
to see the emptiness
(Rebecca Rust)

(28) では、一夜にして、すっかり雪で覆い尽くす自然の力に神の業を見る思いを表現しているといえよう。

「平淡・軽妙な趣」とされる「軽み」に関して、Reichholdは何も述べていないが、“Using Humor” の項目をあげているので、これに相当すると考えられる。

(29) in front of the go-go bar
a broken umbrella
shakes with the wind
(Alan Pizzarelli)

(29) は、破れた傘が風に吹かれてはためいている様子を“shakes”と表現しているが、「踊りの身体を揺り動かす」の意味もかけてあり、ユーモラスな感じが伝わってくる。

5. まとめ

Reichhold (2002) の24の分類を修正、追加をしながら、再整理をしてお示してきた。

大きく言語形式的、言語外的に2分類したが、これらも意味に関わる以上明確に分けることは難しく、あいまいな部分や重複している部分はもちろんある。また、これらがすべて網羅しているわけでない。さらなる分析が必要である。これらの分類の中のほとんどは、日本語の俳句の手法と重なるので、日本語俳句には無い英語俳句特有の特徴がないか調べる必要がある。例えば、本論では触れていないが、(10) の俳句のように、英語俳句では人称代名詞“he”や“she”を被指示語がないまま、いきなり使用されていることが多い。

(10) waterfall at night—

her long
black
hair

この場合、「滝」を指示しているというより、「女性」という意味で使用していると思われる。代名詞は、名詞の“woman's”という語より音節数が少ないことで、より簡潔に表現できる利点がある。その点で重宝されているのではないかと考えられる。このように、日本語俳句には無い英語俳句の特徴をもっと調べていくことを今後の課題にしたい。

注

- ¹ Reichhold (2002: 55-70) の24の分類項目の見出しを次にあげておく。1 The technique of comparison 2 The technique of contrast 3 The technique of association 4 The technique of the riddle 5 The technique of sense-switching 6 The technique of narrowing focus 7 The technique of using a metaphor 8 The technique of using a simile 9 The technique of the sketch or Shiki's shasei 10 The technique of double entendre (or double meanings) 11 The technique of using puns 12 The technique of wordplay 13 The technique of verb / noun exchange 14 The technique of close linkage 15 The technique of leap linkage 16 The technique of mixing it up 17 The technique of Sabi 18 The technique of Wabi 19 The technique of Yugen 20 b The technique of the paradox 21 The technique of the improbable 22 The technique of using humor 23 The technique of “As is above; Is below” 24 The technique of finding the divine in the common
- ² 2行書き、4行書きなどももちろん存在する。日本語の俳句が1行なので、英語でも1行で書くべきとする者もいる。
- ³ 言語的分類と内容的分類の混在については、13の“the technique of verb / noun exchange”と言語形式機能による項目もあれば、10の“the technique of double meaning”と意味による項目もあるというように、分類観点が異なるものが区別されずに扱われている。分類項目の不足例としては、6の“the technique of narrowing focus”と「焦点を狭めていく」という項目はあげているが、「焦点を広げていく」項目がないことなどである。重複している項目例として、10の“the technique of double meanings”と11の“the technique of using puns”があげられる。これらの項目を別々に設けているが、厳密に分類するとすれば、“pun”は“double meaning”の下位範疇とするべきである。
- ⁴ 5の“the technique of sense-switching”の例として、芭蕉の俳句の英語翻訳“old pond / a frog jumps into / the sound of water”があげ、説明として、「飛び込む先が水の音へと」

ていて、通常『水』という物質に飛び込むとするところを『音』へと変えている」として
いる。しかし、日本語の俳句からの解釈だと「蛙が飛び込んで、水の音がした」と捕らえ
られるので、これは英語翻訳時に解釈がずれているのではないかと考えられる点が
あり、例としてあげるのは不適切ではないかと思われる。

- ⁵ Reichhold (2002: 66 – 67) : “This is the twin brother of *sabi*, which has just as many
personas, that can be defined as poverty or beauty judged to be the result of living simply.
Frayed and faded Levis have the *wabi* that bleached designer jeans can never achieve.”
- ⁶ Reichhold (2002: 66) : “...no one can really, truly comprehend what *sabi* really is and thus
they change its definition according to their moods. Some call *sabi* ? beauty with a sense of
loneliness in time, akin to, but deeper than, nostalgia...”
- ⁷ Reichhold (2002: 67) : “This is another of these Japanese states of poetry which is usually
defoned as “mystery” and “inknownable depth”.”

参考文献

- Donegan Patricia (2003) *Haiku* Boston: Tuttle Publishing
- Higginson J. William (1985) *The Haiku Handbook* Tokyo: Kodansha International
- 星野恒彦 (2002) 『俳句とハイクの世界』 東京：早稲田大学出版部
- Reichhold Jane (2002) *Writing and Enjoying Haiku* Tokyo: Kodansha International
- Ross Bruce (ed.) (1993) *Haiku Moment* Boston: Tuttle Publishing
- 佐藤和夫 (1987) 『俳句からHAIKUへ』 東京：南雲堂
- 佐藤和夫 (1991) 『海を越えた俳句』 東京：丸善
- 内田園生 (2005) 『世界に広がる俳句』 東京：角川書店
- Yasuda Kenneth (2001) *Japanese Haiku* Boston: Tuttle Publishing
- 吉村侑久代・阿部貢 (2003) 『Haikuのすすめ』 Tokyo: The Japan Times